令和４年度　「大学生の力を活用した集落復興支援事業」

調査研究報告書

福島大学　岩崎ゼミ

×

福島県二本松市　戸沢７区保全会

国立大学法人　福島大学　行政政策学類　岩崎ゼミ

令和４年　　２月

目次

1.地区の印象と捉えた課題(2 頁)

2.今年度の活動内容（3-5 頁）
-9 月 10 日　顔合わせ
-10 月 9 日　お祭り
-11 月 11 日　保全会の役員会
-11 月 27 日/12 月 11 日　保全会作業
-1 月 12 日　関さんにオンラインインタビュー
-1 月 19 日　ゼミでのワークショップ

3.課題解決のための提案（6-7 頁）
①里山の整備とその利活用
②竹の活用
③田向の湯の活用

4.今年度の活動の考察（8 頁）

5.今後にむけて（9 頁）

〇参考文献（9 頁）

１．　地区の印象と捉えた課題

私たち福島大学岩崎ゼミは、今年度１年目の活動として、福島県二本松市東和地区戸沢７区を対象として地域の課題について取り組んできた。戸沢７区の保全会の方々と交流をし、お話を聞いたり、実際に保全会の活動に参加させていただいたりすることで、地域の現状や課題について知り、その原因や背景を考察することに重点を置いて活動を行った。

まずは、そこで感じた戸沢７区の印象と捉えた課題を紹介する。

地区の印象

最初に戸沢７区を訪れて感じた印象は、自然豊かな中山間地域であることだ。この地区は、広大な田畑や竹林が広がっており、山々に囲まれている場所に位置している。保全会の方々との顔合わせで、地区を散策する機会を設けさせてもらい、案内をしていただいた。整備が不十分な耕作放棄地も多く、土地全体が農業に使われているわけではないようだった。さらに、空き家も何軒かあった。また、住宅が集まっている位置から少し離れた場所に、「田向の湯」という冷泉があり、ここは看板が設置されており、外観はきれいで整備されている様子だった。他にも感じた印象としては、戸沢７区は少子高齢化が進んでいるが、地域のつながりは充実しているという点だ。近くに東和小学校があるが、子供は少ない。また、人口も 100 人に満たず高齢化率も高い地域となっている。しかし、住民の方々との交流で感じたのは、地域のつながりの強さだ。住民同士はほとんどが見知った顔で、挨拶をしたり、立ち話をしたりと都市部や地方都市の中心街地では見られないような関係性があった。保全会のメンバーで、食事や飲み会も頻繁に行っているようで、住民同士のつながりの強さを感じた。

捉えた課題

次に、活動していく中で捉えた戸沢７区の課題について紹介する。現状の１番の課題として挙げられるのは、住民の高齢化や人口減少による、地域資源の維持の難化である。働き世代は他の地域に移住している方が多く、個人による土地や建物などの維持はもちろん、保全会のメンバーによる保全活動も難しくなっている。耕作放棄地や空き家が増え、住民の悩みの種となっている。特に竹林の整備が大きな課題となっており、伸びきった竹林は定期的に整備されるが、その広大さや繁殖力の高さによって、竹害が発生している。

また、戸沢７区の貴重な地域資源である「田向の湯」の利活用も課題の１つである。飲料水としては使用できないが、弱アルカリ性で美容に効果があり、お風呂のお湯として利用できる。しかし、居住エリアから少し離れており、水を汲み運ぶのが難しいことから、利用している住民はほとんどいないのが現状である。美容効果もあり誰でも自由に使える田向の湯を地域資源としてどう活用するのかも大きな課題だ。

２．今年度の活動内容

一年目となる今年度の活動としては、できるだけ多く地域に訪問し地域の方との交流を多くすることに重点を置いた。地域の課題に取り組むにあたって、まずは地域の方がどのような思いを抱いているのか、どういった点に改善を求めているのかを知ることが重要である。そのため地域の方と一緒に作業を行ったり、お話を聞かせていただいたりと、時間を多く共有することで、地域について、そして地域住民の方について理解を深められるよう活動した。

9 月 10 日　顔合わせ

戸沢７区集会所にて保全会役員３名の方と顔合わせを行った。ここでは、戸沢という地域について教えていただいたり、現在の課題などについて議論を行ったりした。また最後には役員の方の車に乗せていただき、説明をしていただきながら地域を一周した。

戸沢を訪れるのはメンバー全員初めてだったが、実際に自分の目で見ながら地域を散策したことで、地域をより深く知ることができたように感じる。

↑戸沢７区集会所

↑散策で見た田向の湯の看板

１０月９日　お祭り

顔合わせを行った際に地域の方にご紹介いただいた、近くの地域のお祭り（針道のあばれ山車）を見に行った。

↑あばれ山車

↑あばれ山車祭り

１１月１１日　保全会の役員会

保全会の役員会に参加させていただいた。この役員会では現在の地域の問題となっている点や住民が困っていることなどを挙げ、その解決に向けての話し合いが行われた。またこの役員会には１３名の役員の方が参加されており、初めてお会いした方もいらっしゃったため、改めて自己紹介も行い交流も深めることができた。

実際に役員会に参加したことで、保全会が地域とどのようにかかわっているのかを知ることができたように思う。さらに役員会の中で現在地域の方が実際に困っていることや不便に感じていることを聞くことができ、地域の課題について理解を深めることができたように感じる。

↑役員会の会議

↑役員会での集合写真

１１月２７日 / １２月１１日　保全会作業

保全会の役員会にて決定した寄せ切りの作業に２日間にわたって参加させていただいた。この作業では河川やその周辺の清掃作業、そして竹の伐採を行った。竹が重く想像以上に大変な作業だったように思う。また作業を一緒に行ったことで、今後こういった作業を若者が少ない中で行うことは、体力面から考えて困難が伴うようになるのではないかと感じた。

さらにこの作業の中で複数の方にインタビューも行った。インタビューは事前に考えてきた内容を作業の合間や休憩時間に質問する形で行った。また学生それぞれが作業を一緒に作業をする方にインタビューをすることで、多くの方にお話を伺えるように心がけた。

このインタビューでは、地域の方が思う戸沢の魅力や課題はどういった点か、自分が小さい頃と変わった点はあるか、現在の戸沢に対してどのような思いを持っているかなどについて伺った。それぞれの方の視点からの意見を聞かせていただくことがき、地域に対してどういった思いを抱いているのかを知ることができたと思う。

↑竹の伐採の作業

↑作業後の集合写真

１月１２日　保全会事務局長にオンラインインタビュー

保全会事務局長の方にお話を伺った。彼は戸沢に移住をしてきた方で、現在では地域に欠かせない存在となっている。

このインタビューは zoom を用いてオンラインにて行った。彼自身に関することや戸沢についてなど、事前に質問したいことをまとめた上で、お話を聞かせていただいた。

具体的には戸沢に移住した経緯や今後の取り組みなどについてお話を伺った。彼は里山と人々の関係を重視しており、現在つながりが希薄しているつながりを再構築していきたいと話されていた。このインタビューは私たちの考えを深める非常に良い機会になった。

１月１９日　ゼミでのワークショップ

大学のゼミにてワークショップを行った。地域の良さをどのように活かすことができるか、今後どういった取り組みが必要となってくるかなどについて、SWOT 分析を用いて意見を交わした。具体的には、地域の強みと弱み、そして社会の機会と脅威の視点から議論を行った。地域資源が豊富であることや少子高齢化が進んでいること、物価が上昇していることなどの様々な点を考慮しながら、地域でできることやすべきこと考えた。社会の状況と地域の現状をどのように結びつけるかを考えたことで、新たな視点も得ることができた。

↑ゼミのワークショップ

↑ゼミのワークショップ

3.課題解決のための提案

戸沢 7 区での交流やインタビューを通して判明した課題を大きく 3 つに分けて説明していく。

①里山の整備とその利活用

令和 5 年 1 月 12 日に行った、戸沢 7 区保全会の事務局長にインタビューをした際「里山が戸沢のカギになる」と述べていた。高齢者の増加や原発事故により里山の整備が行き届かず放置されていたという。

里山（里地里山）とは「原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域」である（環境省）。山に囲まれている戸沢は自然の宝庫であり、活用の余地が大いにある。原発事故の影響で整備がされていないと述べたものの、放射線の線量が上がったというわけではないため、除染作業をせずとも活動が可能である。

↑戸沢の里山の風景

②竹の活用

戸沢や戸沢が位置する福島県二本松市は竹が生い茂っていて、現地住民の方々はその活用に苦悩している。元々二本松市（旧：東和町）は養蚕が盛んで、全盛期である 1970 年代の生産額は年間 13 億円に達したほどだ。養蚕を行うために蚕のえさである桑を育てていたものの、土地の持ち主の死亡や後継者不在等の理由により、桑畑が放置され竹が大量に生えているという状態に至った。

竹の活用法として、「竹チップ」が挙げられる。寄切のような保全会での整備活動を実施することにより行政から補助金が給付されるため、それを使用して企業から加工用の機械をレンタルし、住民の方々が竹チップを製作した経験がある。

↑生い茂った竹

また「竹の風鈴」もある。戸沢はイノシシだけでなくモグラも出現するという。イノシシの対策として田の周りに電気柵を設置しているが、モグラの対策は特にされておらず住民の方々も困っている。そのため戸沢に豊富にある竹を用いた風鈴のような音のでるものが効果的ではないかという意見が出た。ただ竹の音がモグラにとって効果的かはわかってい

ないため、実証して試していく必要がある。

更に、「竹の休憩所」という考えもある。令和 5 年 2 月 11 日に行われた本事業の活動報告会では同じく二本松市竹ノ内集落をフィールドにしている「前橋工科大学　都市・地域計画研究室」が行った竹のベンチ等が参考になった。私達は来年度、現在使用されていない屋敷道や整備されていない道を歩き、地域の景色や歴史を感じる「フットパス」を実施しようと考えている。フットパスは外部の人々（交流人口）は勿論、住民の方々にも体験してほしいと考える。戸沢の人々の多くが高齢で、運動する機会が減っていると聞き、フットパスが運動のきっかけとなるかもしれない。こまめな休憩をとれることで運動のハードルを下げ、運動に触れる機会を増やすことも狙いの一つである。ただ、竹ノ内集落と異なり戸沢の竹は細いため、今後も試行錯誤が必要である。

③田向の湯の活用

田向の湯とは、「戸沢で沸いている弱アルカリ性の冷泉（冷たい温泉のようなもの）」である。羽山鉱泉が流れており、上川崎村の村長菅野善次郎により、昭和元年から昭和 16 年まで戸沢字田向地内で開湯されていた。田向の湯は居住エリアから少々離れていて水を汲みに行くことが手間だと感じる方々が多く、放置されている。

私たちは活用法として「水汲み体験」を提案する。「井戸から水を引く」ということは日常では中々体験できないことであり、また公共物であるため汲んだ水も持ち帰り可能だ。弱アルカリ性であるため飲むことはできないものの美肌効果があるため、外部へのアピールを工夫すれば美容に興味を持つ人々が戸沢に訪れるのではないかと考える。

↑田向の湯

また「サウナの水風呂」としての活用法を提案する。近年サウナが流行しており、竹をサウナ室の壁として利用し、田向の湯を併設する水風呂の水として使用するのが面白いのではないかと考えた。しかし令和 4 年 11 月 27 日に行った住民の方々へのインタビュー調査の際、田向の湯を用いた温泉を作ろうとした過去があったことを知った。田向の湯を熱して温泉を作ろうと一部の住民の方々が動いたものの、他の住民の反対や保健所の却下等により実現されずに終わったという。またサウナ環境を整えるための予算が保全会の資金では賄えないという懸念点もあり、実現は難しい。

4.今年度の活動の考察

今年度は 1 年目ということもあり、戸沢 7 区保全会の活動やインタビュー調査を通して戸沢の方々と交流することに重きを置いた。これらの活動を通して、戸沢の人々は住民だけでなく外部の人々も積極的に受け入れて交流しているという印象を強くもった。すでに令和元・2 年には「筑波大学 生命環境学群 生物資源学類 国際資源開発経済学研究室 農村開発研究班」を受け入れている。筑波大学の方々は理系の知識や視点に長けており、法律や地域政策、地域活性化を中心に学ぶ私達とは対照的である。分野にとらわれず戸沢の方々は外部の人間を受け入れてくださったのだ。

現地住民と外部の人間の交流は、双方に新しい知見や視点をもたらす。いままで現地住民にとっては当たり前のことが外部の人間にとっては馴染みのないものでとても魅力的に感じるということは珍しくない。実際に私達は、戸沢の方々が住民同士の顔や名前を知っていて交流が深いということに衝撃を受けた。私たちが一人暮らしをしている地域では学生が近隣住民の大半を占めており、近隣同士での交流は皆無に近い。名前は勿論、顔や学年も知らず、挨拶を交わすことすらない。この状況と比べると、戸沢は住民の関わりが強く、魅力的だということが分かる。

5. 今後に向けて

本事業では，福島県二本松市東和地区戸沢７区保全会を対象地区として活動を実施した。今年度の活動では、前節までの報告の通り、地域の抱える課題の把握、保全会の作業への参加、地域住民の方々に対するインタビュー、SWOT 分析を用いた考察を行った。次年度は、本年度の活動に基づいた地域活性化案をより具体的な形にし、実際に活動に取り組みたい。また、本年度の活動においても積極的に地域に足を運ぶことができたが、次年度に関しては実際に地域活性化案の活動に取り組むため、地域に足を運び、住民の方々と協働して活動するという姿勢をより一層大切にしたい。

次に、今年度の活動を基にし、今後の方向性についてまとめる。先にも述べたように、一つ目は、現在使用されていない屋敷道を活かしたフットパスの整備による、交流人口の呼び込みだ。フットパスとは、自然や風景、伝統的な町並みなどを楽しみながら歩くことのできる小道のことだ。イギリス発祥の歩行者用道路の一種で、昔から使われてきた古道を利用しながら森林や田園地帯、廃線跡、歴史的な場所などを散策できるコースが設定されている。以前通学路などとして使用されていた地域のフットパスともいえる屋敷道を整備し、新たに活用することを提案する。そして、整備されたフットパスによって交流人口を呼び込むことで地域活性化につながると考える。二つ目は、豊富にある竹と田向の湯の利活用についてだ。地域に生い茂る竹林は、実際に伐採の作業に参加して感じたように膨大な数があり、早急な解決案が求められると考える。重労働になる伐採の作業をどう進めていくのかを考えると共に、伐採後の竹の活用方法についてもさらに検討したい。田向の湯に関しては、他の地区にはないような珍しい資源であり、このような大切な資源の利用価値をどう生み出していくべきかについても検討する必要があるだろう。

地元の大学だからこそできる地域へのアプローチをし、今後も積極的に活動に取り組みたい。

〇参考文献

・環境省 自然環境局 「里地里山の保全・活用」
https://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html#:~:text=%E9%87%8C%E5%9C%B0%E9%87%8C%E5%B1%B1%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%80%81%E5%8E%9F%E7%94%9F%E7%9A%84%E3%81%AA%E8%87%AA%E7%84%B6%E3%81%A8,%E6%A7%8B%E6%88%90%E3%81%95%E3%82%8C%E3%82%8B%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82 （最終閲覧日 2023 年 2 月 26 日）

・総務省 「福島県二本松市 『ゆうきの里づくり』」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000111351.pdf （最終閲覧日 2023 年 2 月 24 日）